

額田王「春秋競憐歌」の一解釈

山 本 直 子

一

天皇詔^二内大臣藤原朝臣、競^三憐春山万花之艶秋山千葉之彩^一時、額田王以^レ歌判之歌

冬^ごもり 春^さり来^くれば 鳴^なかざりし 鳥^もも来^き鳴^なきぬ 咲^さかざりし 花^はも咲^さけれど 山^{やま}をしみ 入^いりても取^とらず 草^{くさ}深^{ふか}み 取^とりても見^みず 秋^{あき}山の 木^きの葉^はを見^みては 黄^{もも}葉^ぢをば 取^とりてそしのふ 青^{あお}きをば 置^おきてそ嘆^{なげ}く そこし恨^{うら}めし 秋^{あき}山^{やま}そ我^{われ}は

(卷一・一六)

万葉集卷第一の一六番歌、額田王のいわゆる「春秋競憐歌」は、「春(山)」と「秋(山)」の優劣を断ずるといふ、上代では他に例をみない主題を有する一首である。題詞によれば、天智天皇が藤原鎌足に詔を下して「春山万花之艶」と「秋山千葉之彩」を「競憐」

額田王「春秋競憐歌」の一解釈

させた際に、額田王が「歌」によって判を下したものであるとされる。作歌の場が天皇を中心とした公的な宴であったことはここから明らかであるが、これについては『全註釈』が「文雅の遊びとして、多分漢詩などを作らしたのであろう」とされ、また谷馨氏が「この雅宴に提出せられた競憐の題が、文字通り『春山万花之艶』と『秋山千葉之彩』であったと推定して、誤りはあるまい」とされる^①。ように、漢詩の宴の中の作歌であったと見るのが、現在ではほぼ通説になっている。

内容に目を向けると、この歌は春の長所・短所、秋の長所・短所とを順に述べる「順次速度を増しつつ主張がめまぐるしく変化する」^②展開を見せる。そして秋の短所を述べたその直後で、突然に「秋山そ」との判が示されるのである。

犬養孝氏は、この中に、女性らしい「心情の揺らぎ・迷ひ」を見

一

いだされ、額田王の春と秋それぞれに対する思い入れは、実際には「等価値・等量」であるとされた。さらに、その状態で秋と判定したのは無意識的な選択であって、「迷ひの絶頂、殆んど判断中止のやむなきに至るほどの心情表出」の結果であったとされて、従来の論理的な解釈を否定されると同時に、場の問題にも言及され、これは春側と秋側にわかれて聴いている観衆を、それぞれ一喜一憂させる効果を意図した構成であると述べられた。^③

これ以降、当該歌については、歌の行余曲折する展開をどのように理解すべきか、特に、秋の短所の直後に秋の支持が表明されることから、この選択の論拠が主要な問題とされてきた。土橋寛氏は、秋の判定に関わっては「論理の飛躍ではなく矛盾」があると指摘されつつ、実際に秋が選ばれた理由は「雅会の開かれた当座の季節が秋であ」ったからだと言われ、判断の基準を場の即境性に求められた。^④ また近年では、上原優子氏、毛利正守氏をはじめとして、これまで単に長所・短所ととらえられてきた春秋それぞれの叙述を再検討することで、当該歌の展開の根底にあるのは迷いではなく一貫した論理であって、額田王は最初から秋山を支持することを決めていたと論ずるものが多く見受けられる。^⑦

このように様々な論じられてきたわけだが、歌における表現の展開そのものを追ってみたとき、当該歌は、その解釈に今なお問題を

残しているように思われる。そこで本稿では、これらの先行研究を踏まえつつ、歌の表現に即した解釈を試みることにする。

二

一首は「冬ごもり春さり来れば」と、春の到来から歌い出される。さらに生命力に溢れる春の喜びがうたわれるが、続く「山をしみ入りても取らず」「草深み取りても見ず」において、山の植物が茂るのを理由に、春の花は「取る」ことも「見る」こともしないと否定的に述べられる。

さて、この歌の中で、春の景物として取り上げられるのが「花」と「鳥」である。花と鳥を一首に詠み込んだ「花鳥歌」の発生と展開については、井手至氏が詳細に論じられている。^⑧ 氏は、この歌の「花鳥」は「春の豊かな生命力を示す祥兆としての性格」、つまり記紀歌謡にも見られる「呪物としての性格を残すもの」であったとしながらも、「花」と「鳥」を対偶的に扱っている点に新しさを見出され、「漢詩の世界においては、六朝から初唐にかけて、『花』と『鳥』とが一对のものとして詩の中に詠まれるようになっていたが、額田王はいち早くその手法を和歌の中に取り入れた」と述べられる。^⑨ 井手氏も指摘されるところであるが、この歌では「花」と「鳥」が対句における対偶語として用いられている。万葉集中、一首の中

に「花鳥」が登場するものは多数見られるが、その中でも一組の対として扱われているものは、この歌の他には、

咲く花の色めづらしく 百鳥の 声なつかしき

(巻六・一〇五九、福麻呂)

渚には あぢ群騒ぎ 鳥廻には 木末花咲き

(巻十七・三九九一、家持)

など、後期万葉に数例を見るにすぎない。それでは、「花」が対偶的に用いられた場合、どのような組み合わせが多く用いられたのだろうか。

最も多いのが「黄葉」との組み合わせである。次にいくつか例を挙げる。

春へには 花かざし持ち 秋立てば 黄葉かざせり

(巻一・三八、人麻呂)

春されば 花咲きををり 秋付けば 丹のほにもみつ

(巻十三・三三六六)

春花の にはえ栄えて 秋の葉の にはひに照れる

(巻十九・四二二一、家持)

この用例については、すべて例外なく「春」「秋」という語を含んでいる点が特徴的である。これは「春の花」といえば「秋の黄葉」(逆も然りである)という発想があったことを示しているだろう。

桜井満氏は、万葉集の秋雑歌中には、「詠花」よりも「詠黄葉」が多く伝えられていることを示され、「春の花に対して秋の黄葉という自然観が形成されていた」と述べられる。万葉集の「花―黄葉」は春秋の景物として代表的な組み合わせであったということを確認しておきたい。

そして、「花―黄葉」の次に多く見られたのが、

丹つつじの にははむ時の 桜花 咲きなむ時に

(巻六・九七二、虫麻呂)

本辺には あしび花咲き 末辺には 椿花咲く

(巻十三・三三三二)

のような、異なる種類の花同士を対としたものである。当該歌に関しては、題詞に「春山万花之艶」とあり、「花―こそが春のテーマであったことを考えると、これらの例のように「花―花」として詠む方が適当であったかとも思われるのだが、額田王は主題と直接には関係のない「鳥」を詠み込んだのである。

この選択の背後には、やはり、漢詩文の影響が認められるだろう。特に、当該歌が詠まれた場では一方では漢詩が作られていたであろうことを考慮すると、『懐風藻』に、

求友鶯。嬌樹 含香花。笑叢 積智蔵 翫花鶯

素梅開 素靨 嬌鶯弄 嬌声 (葛野王「春日翫鶯梅」)

といった表現が見られることは、考慮すべき事柄であると思う。これらの漢詩が「花」と「鳥」によって春の理想的な情景を描いたように、額田王もまた、「花」にとどまらない、春という季節そのものが持つ理想的なイメージを演出したと考えられる。

この好意的に提示された「春の花」は、結局「入りりても取らず」「取りりても見ず」と否定される。その根拠となるのが、「山をしみ」「草深み」である。この箇所については春の「短所」と説明されることが多いが、表現だけを取り出してみると、一概にそうは言えない可能性を含んでいるように思われる。

万葉集において、繁茂する植物がうたわれるとき、それは充実した生命力の象徴としての意味をもつことが多く、讃歌の中で褒め言葉として、また挽歌において死者の生前の（生命力を有した）姿に対する表現としても用いられる。典型的な例としては、

…大和の 青香具山は 日の経の 大き御門に 春山と しみ
さび立てり… (巻一・五二)

や、柿本人麻呂の「泣血哀慟歌」の、

うつせみと 思ひし時に 取り持ちて 我が二人見し 走り出
の 堤に立てる 榎の木の こちこちの枝の 春の葉の 繁

きがごとく 思へりし 妹にはあれど… (巻二・二二〇)

いて、人跡が途絶えた結果として、繁栄する植物が詠まれることがあるが、これについても同様に理解される。たとえば、同じく人麻呂「近江荒都歌」では、

…天皇の 神の尊の 大宮は ここと聞けども 大殿は こ
こと言へども 春草の 繁く生ひたる 霞立ち 春日の霧れ
る ももしきの 大宮所 見れば悲しも (巻一・二一九)

のように、変わってしまった人事に対して、変わらない、もしくはいつそう繁栄した自然の姿をうたうのである。生命力に溢れ、繁栄し続ける植物を肯定的にとらえ、それと人間存在とを対比・対照するところに意図があると考えられる。

こういった例から、春の草や植物が茂るといふことは、あくまで好ましい現象として捉えられていたといえるのではないだろうか。当該歌についても、「山をしみ」「草深み」という表現は、その直前に述べられた「鳥」と「花」と同様に、「春の豊かな生命力を示す」ものであったと考えられる。そしてこの春の豊かさが、冒頭の「冬ごもり春さり来れば」から「鳴かざりし」「咲かざりし」と、冬との対比をとることで、一層強く印象づけられることは言うまでもない。

しかし額田王は、この春の好ましい現象を逆手に取るかたちで、「入りりても見ず」「取りりても見ず」と春の否定へと転換させる。この、

「取る」ことが春秋の優劣を判断する上で重要な事柄であることは、伊藤博氏『全注』（巻第一）が「この歌には『取る』が三回も現われ、その逆の『置く』も見られ、折り取るができるか否かに関心が寄せられている」と述べるとおりであるが、それにしてもこの否定の方法はいささか強引ではないだろうか。春の山で花を取るという行為が行われていたこと、またそこに呪的な意味が認められることは、既に先学が解くとおりであるし、

春山の 咲きのををりに 春葉摘む 妹が白紐 見らくし良し

も (巻八・一四二二)

冬ごもり 春咲く花を 手折り持ち 千度の限り 恋ひ渡るか

も (巻十・一八九二)

など、万葉集にもうたわれている。一方、これと同様の表現は黄葉にも見られる。

奈良山の 峰のみみち葉 取れば散る しぐれの雨し 間なく

降るらし (巻八・一五八五)

ひとりのみ 見れば恋しき 神奈備の やまのみみち葉 手折

り来り君 (巻十三・三三二四)

このように、花と黄葉はともに人々に折り取られ、鑑賞されるものであった。にもかかわらず、当該歌では、花は「手に取れない」と否定しながら、黄葉は「取る」と肯定していることになり、この否

定の論理は現実的な説得力に欠けるのではないかと思われる。

い。生い茂る植物によって人事が妨げられることをうたう歌の中に、

秋山の 黄葉を繁み 惑ひぬる 妹を求めむ 山道知らずも

(巻一・二〇八、人麻呂)

のような、秋の山の黄葉に関するものがあることから、春の否定の根拠は、実際には秋にも通じるものであったのではないかと考えられるのである。既に述べたように、先行研究では、額田王の春・秋の優劣の判断基準は、結局は「取る」ことが可能かどうかという点にあることが指摘されてきた。確かに表現の上からはそうとしか読めないのだが、ただ、現実的に「山や草が茂っていて手に取れないから」春の花は良くないという論理が、説得力を持ち得たかという点、決してそうではなく、むしろまさに「強弁的表現」であり、「言いがかり的」な理屈であるように思われる。

春の花を否定するのであれば、もっと明確に、誰もが納得するような欠点（あるいは秋の黄葉に比べて劣っている部分）を述べればよいはずであるが、額田王はそういった方法は取っていない。春そのものについては、鳥、花、山の植物の繁栄といった、生命力に満ちた理想的な景色や現象を描きながら、「取らず」「見ず」という他でもない額田王自身の行動をもって春山の花を否定しているのである。つまり、「私は取らないし見ない」から春の花は劣るといふこ

とになる。これは、この選択が一般的・客観的なものではなく、極めて額田王の主観的なものであるということを示しているのではないだろうか。額田王は最初から、春を否定することを決めていたと思う。ただし、春という季節や春の花そのものの欠点をあげつらうなど、万人に了解される論理を取らずに、個人の判断により引き寄せたかたちで否定したように思われるのである。結句の「秋山そ我は」の「我は」という語にも、額田王のこういった意識があらわれているのではないだろうか。

三

秋の描写は、秋山に入つて実際に木の葉を見るところから始まっている。この時点で既に「見ず」とうたわれた春とは異なる段階にあるといえるが、その木の葉を「黄葉」と「青き」とにわけて表現する。ここで注目したいのが、「青き」と形容される景物である。

万葉集中、「青」という語は、枕詞をのぞくと約五十例用いられている。「青」と表現されている対象として、最も多いものが「青山（青垣山）」、次が「青柳」であり、これら山と植物に関連する用みだけで全体の半数以上を占める。この、山と植物に関するものの中から季節が特定できるものをいくつか挙げる。

…青山を 振り放け見れば つつじ花 にほえ娘子 桜花

栄え娘子… (卷十三・三三〇九、人麻呂歌集)

梅の花 咲きたる園の 青柳は 縷にすべく なりにけらず

や (卷五・八一七)

春霞 流るるなへに 青柳の 枝くひ持ちて うぐひす鳴く

も (卷十・一八二二)

秋の露は 移しにありけり 水鳥の 青葉の山の 色付く見れば

ば (卷八・一五四三)

一見して明らかなどおり、ほとんどが春の景物として「青」をうたっている。全体の中で唯一秋に関連するのが、最後に挙げた一五四三番歌で、これは当該歌と同じ「青葉」の用例であることから注目されるのはあるが、この「青葉」は秋になつて山が紅葉する前の、つまり夏以前の樹木のさまを指しており、秋の景物としての「青葉」をうたつたものとは言えない¹⁶。また、「青」は漢詩文においても、

青青園中葵 朝露待日晞 陽春布德澤 万物生光暉

〔長歌行〕、『文選』卷二十七「樂府三首」

春草鬱青青 桑柘何奕奕

〔晋潘岳「静居懷所歎」、『玉台新詠』卷二〕

聊乘「休暇景」 入苑望青陽 素梅開素豔 嬌鶯弄嬌声

〔前出、葛野王「春日詠鶯梅」、『懷風藻』〕

など、春と関連する色として詠まれている。

これらの用例から、「青」は基本的に春の歌に詠み込まれる色であつて、その意味で「青き」というのは秋らしからぬ景物といつてよいだろう。さらに言えば、「青き」は秋の景物として賞美・言及される対象とはならないのではないかと思われるのである。

このように考えると、当該歌において、なぜ額田王は秋の景物として「青き」を詠み込んだのかという疑問が生じてくる。この歌の中で、秋の「青き」は、いったいどのような意味を持っているのだろうか。

額田王は、「黄葉」を「取りてそしのふ」とうたう一方で、「青き」は「置きてそ嘆く」、さらに「そこし恨めし」とうたう。この「青き」に関わつて用いられている心情表現、「嘆く」と「恨めし」に注目したい。

まず、「嘆く」という語が用いられている歌は集中に百首あまりあるが、「嘆き」の内容については、大きく二つのパターンにわけられると思う。恋人や友人、家族との別れや不在、または片恋や会えない状態に対する「嘆き」を表すものと、人の死に関わつての「嘆き」を表すものである。前者は、たとえば柿本人麻呂「石見相聞歌」の、

…いや遠に 里離り来ぬ いや高に 山も越え来ぬ はしきや

額田王「春秋競憐歌」の一解釈

し 我が妻の児が 夏草の 思ひしなえて 嘆くらむ 角の里
見む なびけこの山 (巻二・一三八)

などのように、恋愛に関わる歌が圧倒的に多いが、雑歌や羈旅歌、防人歌などにも広く用いられている。後者についても同様に人麻呂の用例を挙げておく。

…我妹子と 二人我が寝し 枕づく つま屋の内に 昼はも
うらさび暮らし 夜はも 息つき明かし 嘆けども せむすべ
知らに 恋ふれども 逢ふよしをなみ… (巻二・二二〇)

両者は対象が生者が死者かという違いだけで、どちらも心惹かれる他人と不本意にも距離を置くことになってしまうことに対する、悲しみややるせなさを示す表現である。万葉集中の「嘆き」は、ほぼこのどちらかに当てはめて考えることができるが、数首に限り、「嘆き」の対象に人以外のものをとるものがある。当該歌と、次の三首である。

なつきにし 奈良の都の 荒れ行けば 出で立つごとに 嘆き
し増さる (巻六・一〇四九、福麻呂)

…卯の花の 咲く月立てば めづらしく 鳴くほととぎす あ
やめぐさ 玉貫くまでに 昼暮らし 夜渡し聞けど 聞くこと
に 心つごきて うち嘆き あはれの鳥と 言はぬ時なし

(巻十八・四〇八九、家持)

：鳴く鳥の 声も変はらふ 耳に聞き 目に見るごとに うち
 嘆き 萎えうらぶれ しのひつつ 争ふはしに 木の暗の
 四月し立てば 夜隠りに 鳴くほととぎす：

(巻十八・四一六六、家持)

一首目は荒れ果てた「奈良の都」に対する「嘆き」であることから、先に述べたものと同じく、「悲嘆」の意味にとつて間違いはないだろう。問題は二首目、三首目の大伴家持の歌である。二首目はほととぎすの鳴き声を聞いて、三首目は花や鳥の声に対して「嘆く」とうたっているのだが、この「嘆く」をどのように解釈すればよいのだろうか。

清水靖子氏は、この二首の「嘆く」は「賞美する、賛美する」という意味で、さらにその理解を額田王の当該歌の「青きをば置きてぞ嘆く」の「嘆く」にもあてはめて、この表現は「青い葉は(中略)手に取らず、置いて賞美する」と捉えるべきであり、「短所でない」と述べられる。しかし、家持の「嘆く」を単なる「賞美する、賛美する」と解釈してしまつてよいのか、疑問が残るところである。鳥の声を耳にすると懐旧の情が起こるとうたう歌は集中にいくつも見られるし、二首目は「あはれ」、三首目は「萎えうらぶれ」という、複雑な心情を表す語が接続している点も見逃せない。また、百例近くある用例の中で、こういった使い方をしているのが家持のこ

の二首だけで、同時代の歌人にも用例がないところをみると、家持に特有の表現と考えるべきではないだろうか。

これらの理由から、本稿では、額田王の「嘆き」は広義の悲しみを表す否定的な表現であると考える。「嘆く」は、恋人との離別や片恋、あるいは親しい者との死別という状況下で、その悲しみを表現する行動である。つまりこれは、相聞や挽歌において核となる感情を担うことばであり、ある程度強い悲しみを示すことばであったといえるのではないだろうか。

次に、「恨めし」について見ていきたい。「恨めし」という語を取り上げた論究は、近年多く見られる。主だったものとして、上原優子氏は、「恨めし」という語は「長く尾を引くような、いわば恨めしく思う対象への執着」を含んでおり、「恨めしく思うことによつてその陰にあるものとの関係を保とうとする意識が働いている」ことから、当該歌における「恨めし」も「完全な否定ではなく、むしろそこにこそ執着があり、作者を秋へとひきつける根拠となりえた」と述べられる。また毛利正守氏は、「恨めし」という語は「まず引かれるものがあつて、はじめて用いられる語」であり、これはつまり「心引かれるものがなく、好意的に接することなく、心うごかないところに『恨めし』の心情もまたない」とされる。両論はともに、「恨めし」が「秋山」の否定とはならないと理解されたも

のである。結論としてはこれらと重なるところもあるが、本稿ではまた異なった視点から「恨めし」に関する考えを述べたいと思う。

万葉集中に用いられている「恨めし」の語は、次の八例である。

①春日野に 粟蒔けりせば 鹿待ちに 繼ぎて行かましを 社
し恨めし (巻三・四〇五)

②我妹子を 相知らしめし 人をこそ 恋の増されば 恨めし
思へ (巻四・四九四)

③：家ならば かたちはあらむを 恨めしき 妹の命の 我を
ばも いかによよと には鳥の 二人並び居 語らひし 心
そむきて 家離りいます (巻五・七九四、憶良)

④ひさかたの 天つしるしと 水無し川 隔てて置きし 神代し
恨めし (巻十・二〇〇七、人麻呂歌集)

⑤恨めしと 思ひて背なは ありしかば 外のみそ見し 心は思
へど (巻十一・二五三二)

⑥：こと放けば 国に放けなむ こと放けば 家に放けなむ 天
地の 神し恨めし 草枕 この旅の日に 妻放くべしや (巻十三・三三四六)

⑦耳無の 池し恨めし 我妹子が 来つつ潜かば 水は涸れなむ
(巻十六・三七八八)

⑧恨めしく 君はもあるか やどの梅の 散り過ぐるまで 見し

めずありける (巻二十・四四九六)

「恨めし」と感じる対象を見ていくと、「社」、「我妹子を相知らしめし人」、「妹の命」、「神代」など、「嘆く」に比べると多様な状況、相手に対して用いられることばといえるだろう。さらに「恨めし」については、「こうあつて欲しかったのに」という、現状とは異なる願望や理想が具体的に示されている例が複数ある点が注目される。たとえば①は反実仮想の助動詞「まし」を用いて、毎日でも通いたいののに、現実には「社」が邪魔でそれが叶わないから「恨めし」だとうたう。③は「家ならばかたちはあらむを」で、家にいたならば無事であったらうに、現実にはそうではないから「恨めし」となるわけであるし、⑥の「こと放けば国に放けなむ」「こと放けば家に放けなむ」、⑦の「我妹子が来つつ潜かば水は涸れなむ」といった表現も同様である。

このように、「恨めし」とは、特に具体的な願望や理想があつて、それが叶えられなかったときに、その要因となつたものに対して抱く否定的な感情であると考えられる。それでは、当該歌の「恨めし」に対して、額田王が抱いていた理想とは何か。無論、「黄葉」である。「黄葉」であつてはしかなかったのに、そうではなく「青き」であつたから、その「青き」に対して「恨めし」とうたうのである。額田王が「秋山」の描写において、わざわざ秋の景物らしからぬ

「青き」を持ち出して「嘆き」「恨めし」とうたうことは、「青き」に対して落胆する心情の表現である同時に、「黄葉」に対する強い愛着を示す表現であると受け取ることができるのではないだろうか。「春の花」と対置され、賞美・鑑賞される秋の景物は「黄葉」である。「青き」の否定は秋の景物としてふさわしくないものへの否定であって、「秋山」そのものへの否定とは捉えがたい。それどころか、「青き」への否定を通して「黄葉」を強く肯定することで、最終的な「秋山そ我は」という結論へと破綻なく繋がっていくと理解されるのである。

四

見てきたように、「春秋競憐歌」に認められるのは、一貫した秋山への支持であり、さらに具体的に言えば秋山の黄葉への思い入れであった。

額田王は、春の好ましい景を詠みこみつつ、「手に取って見ない」ことを理由に春山の花を否定する。だが実際に表現を見ていくと、春という季節、もしくは花の美しさを否定する表現は一切含まれていない。客観的には肯定ともとれる表現を並べながら、自身の行動という主観的な基準によって春山は支持されなかったのである。これまで言われているとおり、うたわれた場にはそれぞれ春山と秋山

の支持者がいるとして、ここには、春山を支持する聴衆を納得させようとか、論破しようという意図は見いだせないように思われる。むしろこういった論理を取ることで、額田王は春山の支持者たちの面目を保ったまま秋山への支持を表明しようとしたのかもしれない。一方で、秋山の「青き」にまつわる心情表現である「嘆く」「恨めし」は、やはり「青き」に対する直接的な否定であると考えなければならぬと思う。多くの万葉歌人たちが「嘆き」をうたうことで恋人や死者への愛情を表現したように、また宮廷歌人が皇族の死に際して誇張的ともとれる悲しみの表現によって死者を称えたように、「青き」への嘆きの向こうに、「黄葉」へのこだわりを見出すことができるのではないだろうか。

注

- ① 谷馨「王と漢詩文」（額田王）、早稲田大学出版部、一九六〇年四月
- ② 青木生子他校注『新潮日本古典集成・萬葉集二』、新潮社、一九七六年十一月
- ③ 大養孝「秋山われは―心情表現の構造を中心に―」（『萬葉の風土』、塙書房、一九五六年三月）
- ④ 土橋寛「額田王」（『万葉開眼（上）』、日本放送出版協会、一九七八年四月）
- ⑤ 上原優子「春秋判別歌」の論理性について」（『古代研究』第十七号、一九八四年十一月）

- ⑥ 毛利正守「額田王の心情表現―『秋山我れは』をめぐって―」（『文林』第二十号、一九八五年十二月）
- ⑦ 辻憲男「春秋のさだめ―額田王序説の（一）―」（『親和国文』第二十五号、一九九〇年九月）や、平野由紀子「額田王の『春秋競憐判歌』考―歌の表現と構造をめぐって―」（『論叢』第二十二号、一九九四年六月）など。
- ⑧ 井手至「花鳥歌の源流」（『万葉集研究』第二集、塙書房、一九七三年四月）
- 同「花鳥歌の展開」（『万葉集研究』第十二集、塙書房、一九八四年四月）
- ⑨ 井手至「花鳥歌の展開」
- ⑩ 「花」が対句の対偶語として用いられている例は約二十例あるが、そのうちのおよそ半数が「黄葉」との対であり、四分の一が後述する異なる花同士の対である。
- ⑪ 桜井満「万葉集の花」（『国文学解釈と鑑賞』第五十一巻一号、一九八六年二月）
- ⑫ 井手至「花鳥歌の展開」
- ⑬ 木村康平氏は、「春山が茂るのは、豊かに花が咲き誇るのと同様、本来春山の長所というべきではなからうか」（『近江朝の額田王―春秋競憐判歌』をめぐって―）、『帝京大学文学部紀要』第二十四号、一九九二年十月）との見解を示しておられる。
- ⑭ 駒木敏「額田王の一首―初期万葉歌の側面―」（『人文学』第四百四十二号、一九八四年三月）、岡内弘子「春秋優劣判別歌―とる』をめぐって―」（『香川大学教育学部研究報告』第一部第九十六号、一九九六年十二月）など。なお、当該歌にうたわれた「取る」を呪的行為から脱却した風流的な行為として見るものに、伊藤博『全注』巻第一、中西進「万葉

額田王「春秋競憐判歌」の一解釈

- 歌人論―額田王」（『中西進万葉論集』第三巻、講談社、一九九五年七月）などがある。
- ⑮ 寺川真知夫「春秋優劣歌の表現手法」（『同志社女子大学日本語日本文学』第九号、一九九七年十月）
- ⑯ さらに、
- 水鳥の 鴨の羽色はばらの 春山の おほつかなくも 思ほゆるかも
（巻八・一四五一、笠女郎）
- などを考慮すれば、「水鳥の」の枕詞のあり方として、春の青葉を指している可能性が高い。
- ⑰ 「そこし恨めし」の「そこ」が指している内容については、春山を指すとするもの（吉田増蔵「萬葉集の長歌を漢文修辭法より観たる一斑」、佐佐木信綱編『萬葉学論纂』所収、明治書院、一九三二年三月）もあるが、本稿では「そこ」の一般的な用法に従い、直前の「青きをば置きてそ喚く」を指すと考える。
- ⑱ 清水靖子「額田王―春秋競憐判歌について―」（『成蹊国文』第二十二号、一九八九年三月）
- ⑲ 古いにしへに 恋こひふらむ鳥は ほととぎす けだしや鳴きし 我が思おもへる
（巻二・一一二、額田王）
- ごと
- 近江の海 夕波ゆふなみ千鳥 汝なが鳴けば 心こころもしのに 古思いにしへのはゆ
（巻三・二六六、人麻呂）
- など。特にほととぎすは「蜀魂」の故事と関係して、懐旧を催す鳥としてうたわれてきたという点も考慮すべきと思われる。
- ⑳ 上原氏前掲論文
- ㉑ 毛利氏前掲論文